

○ハルジヨオンの変異品について (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: On some variations of *Phliadelpchia Fleabane* in Japan

周知の通り、北アメリカを原産とするハルジヨオン *Erigeron philadelphicus* Linnaeus, Sp. Pl. 863 (1753) は、彼地においても極めて広い分布域 (Type locality はカナダ) を示し、Philadelphia Fleabane あるいは Philadelphia Daisy の米名で呼ばれている。しかも本種は近似種も多く、いわゆる変異の巾もかなり大きいため、分類困難なグループの1つに数えられている。ところで本誌46巻11号で水島正美博士は、ハルジヨオンの繁殖に関連した興味ある見解を述べられたが、まったく近年、我国における本種の繁殖、分布は驚くべきものがある。筆者も我国における外来植物調査の一環として、本種について観察を行って来たので、以下、現在までに手もとに集った資料を基に、少しく蛇足を加え、同学諸氏のご参考に供したいと思う。

その1つは、1966年5月6日、東京都下八王子市の農林省林業試験場浅川実験林内で、林 弥栄博士が見出され筆者にご提供下さったものである。これは舌状花が縮少し、ほとんど欠くようにみえる1品で、ちょうど古く、池野成一郎博士が東京駒場の旧東大農学部構内で発見、報告されたボウズヒメジヨオン (植物及動物 2(1): 25-32, 1934) に対比されるべきものと思われる。因みに、この型は近年、我国では見出されないようであるが、北アメリカでも各地で稀に認められるらしく *E. annuus* (L.) Persoon var. *discoideus* (Victorin et Rousseau) Cronquist として知られている。

この浅川産のハルジヨオンは、全草の発育が極めて良好な個体であって、決していわゆる貧栄養に伴う単なる舌状花の退化品とは考えられない。

その後、本品の生育状況については知らないが、これを一応ボウズハルジヨオン (林 弥栄氏命名) として記録しておきたい。恐らく、この型のものに対しても、既に適当な学名が存在すると思われるが、この点



Fig. 1. A depauperate form of *Erigeron philadelphicus* L. found by Dr. T. Tuyama in Tokyo Pref.

については、今後の調査、研究にまちたいと思う。

次の 1 品は、本属の外來種に興味をもっておられる津山 尚博士から、嘗つて頂戴したものである。これは Fig. 1 に見られるように、本種の矮小型 (?) を想わせ、開花期でも草丈 20 cm 許のものである。これは同氏の邸内に、以前から生じているものの由で、筆者も長年に亘り愛培し、観察しているが、同様な生育状態を毎年続けており、水島氏の指摘されたような栄養繁殖体を数多く生じている。このような形のは、勿論原産地でも認められるらしく form. *angustatus* Victorin et Rousseau なる名で区別されている故、これをチャポハルジョオンと仮称し、ご紹介しておきたいと思う。

なお、これと反対に全草が極めて大きく、壮大なものがあり(原産地では根出葉が 30 cm 許にも達するものと云う)、筆者も、この形に該当するものを、各地で観察している。もしこれを区別するならば form. *scaturicola* (Fernald) Cronquist に当るもので、これを一応オオハルジョオンと呼んでおきたい。

また本種には、花色を主とし区別された園養品も知られていて、これに form. *purpureus* Farwell, Amer. Midl. Nat. 11: 70 (1928) なる名が与えられている。

最初、アメリカ合衆国のハドソン湾附近で得た栽培品をタイプとして記載されたものの由であるが、古く大正時代に我国へ園芸品として、この形のもの(ベニバナハルジョオン、ムラサキハルジョオン)が輸入されたようで、現在、東京近郊に帰化しているものの中には、これの系統が残っているかも知れない。

なお蛇足ながら、文献によれば、本種及びヒメジョオンは北アメリカでは、収れん、強壯あるいは利尿などを目的とした、いわゆる民間薬として用いられ、また葉は野生のシカの食餌となっている由である。従って、我国でも一概に困った雑草とだけ云っておらず、その利用についても考えてみたいものである。

終りに、常に種々ご教示賜っている東京大学理学部の原 寛博士を始め、貴重な資料をご提供いただき、種々ご援助下さったお茶の水女子大学の津山 尚博士及び東京農業大学林学科の林 弥栄博士に対し、厚く御礼申し上げます。(東京歯科大学)

### Summary

*Erigeron philadelphicus* Linnaeus, native of North America, was probably introduced to Japan first for ornamental purpose approximately sixty years ago or perhaps more. At present, this Fleabane well established in sunny waste places around the cities, and has become a troublesome weed. Recently, some variations among them were newly found in Japan, *i. e.* (1) rays reduced and inconspicuous form, (2) depauperate form, and (3) robust form, etc.